

## 多文化社会における統一の模索：マレーシアの経験から

著者

L. ガンデサン

マレーシア首相府国家統一統合局次長

### はじめに

人口 2800 万人、214 のエスニックグループからなるマレーシアには、多種多様な文化と宗教が存在する。エスニシティ、宗教、文化、価値観、信条、習慣の違いにかかわらず、国民はともに調和して暮らしている。多くの国が実現したいと望んでいることを実現しているのである。もちろん、何らかの形での摩擦は避けられないが、十分に対処できている。このような環境では、すべてのエスニックグループが国民形成の過程で統一問題に最大の関心を払うのは当然のことである。

1969 年 5 月 13 日の事件以降、この国のリーダーたちは、国内の平和と調和が決して崩れることのないよう共通の価値によって統一された強力な多民族・多文化社会を構築する必要性を痛感した。マレーシアは幸運なことに、この問題について鋭い先見の明を持つリーダーがおり、国民形成を推進する手段として社会統合をどう進めるかについて賢明な決断を下した。この国には、他人の幸せを誠実に気遣う人々が存在するとともに、他人との関係の中で他人を世話し、何かを共有し、育て、互いに結び付くという態度や習慣も受け入れられている。仲間に対するこのような利他的な姿勢をとること、すなわち、周囲の人の気持ちを思い遣り、困ったことがあれば心配し、すべての人にメリットがある解決策を目指すよう常に努力することによって、現在と将来の世代のためにダイナミックな国家を建設する土台が固められてきたのである。

このような展望と知恵とによって 1970 年に設立されたのが国家統一統合局である。その任務は、国民形成の過程で国民が共有しうる価値観を見出し、確立し、国民に普及させることにある。「統一」とは、国家統一諮問委員会（National Unity

Advisory Panel) が 1992 年に作成した定義によると、我が国の国是（ルクン・ネガラ）と連邦憲法に則って連帯するひとつのマレーシア国家として、多種多様なエスニックグループ、宗教的信条、地域からなる国民が平和的に共存する社会状況を指す。この「統一」を通して、共通の価値観が見出され確立されている。

## 多文化社会

多文化社会かどうかは、エスニシティ、文化、あるいは宗教という観点から判断されることが多い。肌の色、伝統的慣習や生き方、宗教的慣習を基準にすれば国民を分類しやすいため、この方法が便利なのであろう。このような基準による線引きが何世紀にも渡って行われており、現在もなお重要視されている。しかし今こそ、前向きな建設的態度によってこのような区分を無くし、あるいは統合する時が来ているのではないだろうか。不幸なことに、世界各地で最近起きている出来事を見ると、このように国民を区別する古い態度は今後も続くと思われる。共通の中核的価値を持つ多文化社会は、様々なエスニックグループの統合の上に形成される。それぞれのエスニックグループは独自の文化と価値観を実践する自由を持つが、民族の利益よりも国益を常に優先する。これが多様性の中の統一であり、私たちが思い描く「ひとつのマレーシア」という理念の実現に一步近づくことになる。

価値観は、信条、知識、そして私たちの経験から形成される (Ezhar et. al, 2006)。民族的価値観は世代ごとに受け継がれたものであり、私たちの最も基本的な信条と、私たちが最も大切にしている生き方を明確に示すものである。私たちの人生に意味を与え、自分自身、他人、そして互いの目標のために行動するモチベーションの源となる。言うまでもなく、自分自身の価値観を守り、弁護し、推進するのが人間の本性である。従って、異なる価値観が触れ合うと対立や不一致が生じることは避けられない。民族的価値観と国民形成のための価値観とを統合することは、特にマレーシアのような若い独立国では、非常に困難である。多民族、多文化、多宗教というこの状況に最も適したアプローチは統合である。しかも、すべてのエスニックグループの価値観の中に共通

性を見出し、それを共通の価値観の集合体として確立させ、国民形成のために国民に普及させるという形での統合でなければならない。同時に各エスニックグループは、自分たちの価値観を実践する自由を得るが、自分たちの価値観を他者に押し付けてはならない。

私たちは、自分たちが実は多文化の世界に生きているのだということを認識し承認する必要がある。多くの国が多文化社会であり、単一文化社会の国でも実際には国民が互いに触れ合い、絡み合って、共通の運命と未来を築き上げている。グローバル化が進むこの世界では、多文化社会か単一文化社会かにかかわらず、異なる生き方をする人々が互いに交流し、触れ合わなければならない。

## 多文化社会の課題

文化、宗教、習慣、思想、言語の多様性が存在する場合に最も困難な課題は、今も昔も、統一された平和で調和的な社会を実現し、維持し、強化することである。多文化社会であっても単一文化社会であっても、国境を超えた人の移動や貿易のために相互接触や相互交流が劇的に深化している。このような状況では、意見が異なる人を見つけるのは難しいことではない。

そのため、文化間や文明間での対話が必要となる。文化間・宗教間の対話は、平和、安全、繁栄を実現するために今や必要不可欠であり、前提条件ですらある。共同体間に横たわる課題、事実、共通の目標や価値観を、対話によって見きわめ明確化し、それによって異文化間のギャップを埋めて相互理解を進め、多文化社会の課題の克服を目指すことが、本質的に重要である。

文化間や宗教間の対話を成功させるには政府の役割が欠かせないと認識されている。いかなるコンセンサスや合意を結んでも、政府のサポートとコミットメントが無ければ、それを効果的に実行できない。政府は将来的な対立の再発防止策を含めた強制力

を持つからである。国際社会では、このような合意や目標、価値観が存続することを保証できるのは政府だけなのである。

### 「ひとつのマレーシア」への歩み

他国が達成したことを自分たちも成功させ、さらにそれを乗り越えるためには、すべての文化と民族が連帯したひとつの国家として協力しなければならないということ、マレーシア人は心得ている。ひとつのマレーシアに至る道とは、国民がひとつの国家として協力し、同じ運命を築き上げ、共有することである。このような理由から、さらなる統一を進め、統一の重要性を誰もが理解できるよう、努力が続けられている。多宗教・多文化の社会の中で一体感を作り上げ、統一を成し遂げるのは、至難の業である。マレーシアが選択した統一への道のりは、多様性と包括性である。これは国家として取る道とされており、現在では「ひとつのマレーシア」という原則の形で表現されている。

### 包括性を受け入れることによる分極化の克服

どの人間社会や人間関係にも分極化は付き物であり、多元的社会では特にそうである。分極化とは、相反する物の見方、条件、要求が複数存在することである。簡潔な解決策があり得る技術的問題や機械的問題とは異なり、分極化はトレードオフを伴うのが普通であり、慎重な対応が必要となる。社会における分極化は極めて複雑であり、経済体制や政治体制、統治における宗教の役割などについて、多種多様な意見が混在する。

分極化にうまく対処すれば、両極のメリットが最大化すると同時にデメリットが最小化する。どのような状況を最適と見なすべきか、あるいはどの範囲に包括性の原則を適用すべきかは、両極の間で相反するニーズのバランスが取れるよう決める必要があり、そのバランスを実現することが肝要となる。そのため、分極化を効果的なものとするためには、緊張関係があっても、それに対処すればよい。両極の間にある共通の基盤

を拡大し、包括性を通じてそれを後押しし、連邦憲法、ルクン・ネガラ、ビジョン 2020、国家計画（National Mission）、「ひとつのマレーシア」などといった精神や諸原則を指針とすることによって、分極化した状況を同化と分化の間で巧みに操り続けることが不可欠である。

調和と統一の持続という難題は、現在も現実的な重要問題であり続けている。従って、常にこの課題に思いを巡らせ、「ひとつのマレーシア」という言葉に込められた一体感と統一への意識を常に新たにし、育んでいくことが必要である。「ひとつのマレーシア」という理念は、マレーシアの活力を高め、生産性を上げ、競争力を強めることを目指している。これまで、マレーシア人の社会的統合を促進するために複数のプログラムやプロジェクトが実施されてきた。これらは過去数十年間という長きに渡って政府が決意をもって臨んできたことを示している。例えば、1975年に導入されたルクン・トゥタンガ（Rukun Tetangga）という制度は、近隣関係の促進、近隣住民による安全監視の支援、様々な地域活動、環境活動、経済活動、社会市民活動の推進を中心としている。

## 橋渡し役としての RT

ルクン・トゥタンガ（RT）は、そもそも 1969 年 5 月 13 日の民族衝突事件によって治安に問題が生じたため、居住地区に住む人々を守ることを目的として始まったが、その後は、調和的な社会と国民の統一を実現するための橋渡し役を担ってきた。それ以降は深刻な暴動は起きておらず、この状況はアシュトシュ・バーシュニーの議論に疑問を突き付けている。同氏の 2005 年の論文「民族紛争と社会政策（Ethnic Conflict and Social Policy）」を見てみよう。

「マレーシアの資料はあるレベルでは私の議論に反している。マレーシアでは 1969 年以降、大きな暴動が起きていない。36 年以上に渡って民族的平和が続いているのである。政府は社会統合を目的とした新たな施策を開始している。こ

の施策を実施する上で中心となる組織が、近隣レベルの委員会であるルクン・トゥタンガである。政府は、将来的にこの組織をマレーシア全土に設立することを目指している。マレーシアは、過去に民族的暴力に苦しめられた後に民族的平和に向かいつつある社会を比較研究する際の研究材料としては、私が知る限り最適な国の 1 つである。水平的統合というアイデアを強く支持する有力な根拠となっている。」 (Ashutosh Varshney, 2005)

RT は創設から 37 年間で設立数が激増し、2000 年の 1,971 から 2011 年には 5,605 へと、10 年間で約 65%増加した。全国的に急拡大し、主に都市部と都市近郊の居住地区で増えている。これは、RT が地域社会の結束を高めるための活動の要となり、地域の利益とニーズに応じて様々な活動を行っていることを示している。教育、スポーツやレクリエーション、文化、健康、福祉、公共空間のアメニティ、環境、安全、宗教、集会などの分野で RT は活動を主催してきたが、その目的はいずれも、地域住民が互いを知り、相互に助け合って問題を解決し、異なる民族、宗教、習慣、文化を持つコミュニティやリーダーと交流し、良好な関係を築くことであった。従って、地域社会のネットワークをさらに強化し、リーダーのコミュニケーション能力と仲裁能力を向上させるようトレーニングする活動が進められている。さらに、RT は社会奉仕活動や地域の仲裁活動も行っており、政府機関、民間企業、非政府組織と地域社会とを繋げて地域開発プログラムをさらに強化する役割を演じている。

## 結論

社会的、民族的に多様な社会を運営することは非常に困難だということは広く認知されている。それぞれのエスニックグループや社会階級が自己利益の追求と保護に走り、摩擦や紛争、衝突を生むからである。収奪されていると感じる人とそうでない人との間でギャップが生じることが多く、これが人々の間で何らかの行動とそれへの反動を

引き起こす。これを放置すると緊張が生じ、暴動へと発展する恐れがある。街が破壊され、かけがえのない命が失われ、大規模な経済的損失に苦しむことになる。

このような最悪のシナリオを念頭に置くと、社会の安定と調和を実現し維持するために社会資本に投資することには意義がある。マレーシアの場合、1975年以來マレーシア政府は社会資本の重要性を認識しており、すべての地域社会が共通の利益に向けて友好的に協力し、理解し合うための仕組みとして、ルクン・トゥタンガを設立している。ルクン・トゥタンガは、自分たちの地域社会をより良くするために自主的に協力するコミュニティである。地域社会内や地域社会間、あるいは政府機関、民間企業、非政府組織と地域社会との橋渡し役というルクン・トゥタンガの役割は、社会的結束と地域社会の福祉を向上させる上でのモデルと見なされている。

#### 参考文献：

Ashutosh Varshney : Ethnic Conflict and Social Policy, for presentation at Princeton University, Seminar Series on Democracy and Development, April 12, 2007.

Department of National Unity and Integration, Managing Success in Unity, 2010.

Department of National Unity and Integration, Unity In Diversity: Future Plans And Steps Toward Bangsa Malaysia, 2009

Ezhar, T. Krass, S.E. Fazilah, Khadijah & Fadzil, Universal Values for Youth: Workshop Insight from East Asian Countries, 2006.

Government Transformation Programme, The Roadmap, Jan 28, 2010.